



2016年 5月 1日(日)  
夙川教会主日礼拝説教



## 「讚美のころ」

イザヤ書38：1－9、20

### すべてのものにはつくられた目的がある

どのようなものであれ、作られたものには「作られた目的」というものがあるものであります。鉛筆には鉛筆の、杖には杖の造られた目的があります。「つくられた目的がある」ということは、あらゆるものについていえることであり、逆に何の目的もなしに作られたものはないはずであります。イースター島に残されたモアイ像も、今になっては何の目的で作られたのか、その本当のところはわからないようですけれども、まさか無目的に作られたはずはありません。わたしたちにはわからないけれども、目的があつて作られたはずであります。ですから、どのようなものであれ、作られたものには「作られた目的」があると云つてよいのだと思います。

そしてそれならば、当然のことながら、作られたものは作られた目的のために用いられる時に、最大の力を発揮する、ということも言えるのではないのでしょうか。例えば、身近な例で考えますならば、ほうきは床を掃いて塵を集めるために作られています。ですから、ほうきは床を掃くために用いられているときに、一番理にかなつており、最大の力を発揮するはずであります。けれども、ほうきというのは日常的に使うものですから、いろいろな場面で本来の用途とは違う使い方もできます。ある時には天井の隅っこに張られた蜘蛛の巣をからめとったりもできますし、またある時には壁にへばりついているゴキブリを叩き落とすこともできます。このように、本来の目的とは違う目的のためにも用いることはできます。けれども、このような言い方はおかしいかもしれませんが、そのほうきにとって一番幸せなのは、床を掃くために使われている時であるといえるのではないのでしょうか。作られたものは作られた目的に従つて用いられるときに、最大の能力を発揮致しますし、それが自然であり、理にかなない、その作られたものにとってのあるべき姿であるということになるのではないのでしょうか。鉛筆には鉛筆の、杖には杖の作られた目的があり、その作られた目的に従つて用いられる時が、理にかなつて美しいのではないのでしょうか。

### 人間は神の被造物

では、わたしたちはどうなのでしょう。聖書の信仰に従えば、わたしたち人間もまた造られた存在なのであります。もちろん、一般にはそのような考え方はしないでまいりましょう。人間がこの世界に存在しているのは、自然発生的に進化の過程をたどつて存在しているのであり、何かの意志によつて造られたものとは考えません。それならば当然、造られた目的もないこととなります。そのような自然科学的な世界観を土台としてこの世界を理解しようとした結果、現代では目的がないということ、つまり、造られた目的がないなら生きる目的も究極的にはないことになるという、無意味さの迷宮の中にさまよい込んでしまう人々もあります。

けれども、聖書はそもそもにおいて、わたしたち人間は造られた存在であることを告げています。そして造られた存在ならば、なんのために作られたのでしょうか。その目的が必ずあるはずであります。そして、先ほどの例のように、作られたものは、その目的に従つて用いられる時、つまり生きる時、わたしたちは理にかなつて美しい存在となるのではないのでしょうか。聖書はわたしたちに、その本来のあるべき姿というものを教えているのです。では、わたしたちの作られた目的とは何なのでしょう。

### 造られた者の目的・・・詩編の言葉から

詩編103編22節に次のような言葉があります。「主に造られたものはすべて、主をたたえよ」という言葉であります。「主に造られたもの」それが主の慈しみに生きるものの自己理解です。そしてその「主に造られた」あなたがたは「主をたたえよ」と奨励されているのです。つまり、主をたたえよとは、主を讚美せよ、ということでもあります。なぜ、主をたたえることが奨励されているのでしょうか。それは、主によつて造られたものは、主をたたえるために造られたからであります。ですから、同じ詩編の中の33編1節には次のような告白もあります。「主に従う人よ、主によつて喜び歌え。主を賛美することは正しい人にふさわしい」という告白であります。「主を賛美することは正しい人にふさわしい」のであります。「ふさわしい」という言葉について一言もうしますと、「ふさわしい」というのは、日本語よりも強い意味を持っています。「ふさわしい」というのは、主を讚美することは正しい人に「似つかわしい」ということであり、あるいはそれよりもさらに強く「そのものの本質にかなつていく」ということでもあるのです。つまり、主を讚美することが、正しい人、つまり神の御教えに従うわたしたちの本質であるということ。わたしたちにとって、神さまを褒め称えて生きることが出来る時、それが作られた目的にかなつていくのであり、最も美しい生き方をしているといえるのであります。

## 死の宣告を受けるヒゼキヤ

では、わたしたちはどのようにして、神さまを褒め称えて生きることができるものとされてゆくのでしょうか。わたしたちは神さまに造られたものにもかかわらず、罪が絡み付いていますから、造られた目的を見出すことも、またそれに従うことも簡単ではないのです。コヘレトの手紙7:29に「神は人間をまっすぐに造られたが／人間は複雑な考え方をしたがる」という言葉があります。わたしたちは、事柄を複雑にし、余計にややこしくしてしまうのが得意ですから、幼子のようにはなれないのです。つまり、わたしたちが神さまをほめたたえて生きようになるのは、わたしたちの決心や強い意志、あるいは努力や修練によって得られることではないということなのであります。では、いったいどのようにして、わたしたちは主をほめたたえる者とされるのでありましょうか。

物事の意味を尋ねる時の道筋として、その源泉を辿るという仕方があります。それならば、主をたたえることの源泉は旧約聖書に見いだされることとなります。その意味で、今朝のこの礼拝に与えられておりますイザヤ書の箇所はよい例であると思います。この箇所は、ヒゼキヤ王の讚美の歌がまとめられているところなのですが、一体どのようなことがあって、ヒゼキヤ王は主に讚美を献げることになっていったのでしょうか。

ヒゼキヤ王は紀元前700年頃のユダの王であり、旧約聖書の評価によれば大変優れた王でありました。主のみ旨にかなった、数少ない王の一人であります。さて、そのヒゼキヤ王があるとき、大病を患うのであります。聖書にはただ「死の病」とあるだけです。どのような病か分かりませんが、とにかく、命に関わる大変重い病であり、本人もそのことを自覚していたのであります。

大病を患い、命の危機にさらされたとき、わたしたちの心に沸き起こる切なる願いは「生きていたい」という思いであります。いずれ、この世の歩みを終えるときがやってくることは知っているけれども、今はまだその時であって欲しくない、まだ死にたくはない、生きていたい、そのように思うはずであります。ですからここで、大病を患ったヒゼキヤ王も「生きていたい」という切なる願いをかくすことはしなかったはずであります。主に対して、ヒゼキヤ王は心の底から祈り求めたのではないのでしょうか。

しかし、あるとき、そのような死の影におびえるヒゼキヤ王のもとに、預言者イザヤがやってくるのです。そして、次のように宣告するのです。「あなたは死ぬことになっていて、命はないのだから、家族に遺言をしなさい」と。これは、なんとという物言いでしょうか。「あなたは死ぬことになっていて、命はないのだから、家族に遺言をしなさい」このような物言いは、まるで人の苦しみの痛みを感じないような、人情のかけらもないような発言であります。けれども、預言者イザヤは特に冷淡であるということではありませんし、自分の勝手な想像を口にしてしているのでもありません。このイザヤの言葉は、イザヤが神から託された神の御意思であったのであります。神の御意志を勝手に解釈せず、そのままを伝えることが預言者の務めでしたから、イザヤは預言者の職務に従って、示されたまを伝えたのです。しかし、たとえそれが神の御意志であったとしても、このような死の宣告をされて動揺しない人はおりません。そこで、ヒゼキヤは涙ながらに主に訴えたのであります。3節にありますように「ああ、主よ、わたしがまことを尽くし、ひたむきな心をもって御前を歩み、御目にかなう善いことを行ってきたことを思い起こしてください」と、涙ながらに訴えたのであります。自分がこれまで、どれだけ神様に忠実であり、その御心に従ってきたかを切々と訴えたのであります。

## わたしたちを生かしてくださいる主

すると、どうなったかという、その切なる願いは聞き入れられたのであります。主は寿命を15年伸ばしてくださいったのです。本当ならば死ぬところをあと15年生きることが許されたのです。しかしそれは、ヒゼキヤを通して神さまがある業をなされるためでありました。つまり、ヒゼキヤにはなすべき務めがあり、その務めに支えさせるための15年であったのであります。主はこう言われました。「見よ、わたしはあなたの寿命を15年延ばし、アッシリア王の手からあなたとこの都を救い出す。わたしはこの都を守り抜く」と。

神さまはわたしたちひとりひとりに、なすべき務めを与えておられるのであります。ヒゼキヤの場合はそれがアッシリアからイスラエルを守るという使命でありました。そのような使命がわたしたちに与えられているならば、神さまはその使命を全うさせるために、わたしたちを守ってくださいるのです。たとえ死の影が忍び寄り、人の目から見ていかに絶望的な状況であろうとも、神さまはその使命のゆえに、わたしたちを生かしてくださいるのであります。

では、わたしたちにはどのような使命があるのでしょうか。ヒゼキヤがアッシリアからイスラエルを守ったように、わたしたちはこの世の闇の力から神の教会を守る使命があるのではないのでしょうか。具体的な奉仕や献げものを通して、教会を支える使命があります。礼拝を重んじる生活を通して神さまの栄光をあらわす使命があります。高齢のために礼拝に集うことが困難になっても、祈りを献げる使命があります。あるいは、それぞれに与えられた家族を守るという使命があります。自然災害人的災害によって深い傷を負った人々を覚えて支えるという使命があります。弱い立場にある人たちの隣人になってゆくという使命があります。そしてなにより、わたしたちには神の言葉を聞くという使命があるのです。神さまは、そのようなそれぞれに与えられたその使命ゆえに、わたしたちを滅びから救い、その命を延ばすという願いを聞いてくださいるのであります。

8節には「見よ、わたしは日時計の影、太陽によってアハズの日時計に落ちた影を、十度後戻りさせる」とあります。これは、

時を巻き戻すということでもあります。決して変わるはずのない時の流れという自然の理さえも、神さまはわたしたちを生かすためには変えてくださるといふ神さまの愛がここには現れています。つまり、奇跡を起こしてくださるのであります。

### 寿命を伸ばされるヒゼキヤ

このような、自然の理さえも変えてくださる神の強い守りの中にあることを確信したヒゼキヤ王の喜びはいかばかりだったでしょう。それは何によってもあらわすことのできない、尽くし難い喜びであったことでしょう。病にかかり、だんだん体が弱り、痛みに苛まされ、次第に食べ物がのどを通らなくなり、足が立たなくなり、もう死を待つばかりというときに、神様が寿命をのばしてくださったとしたらどうでしょうか。あと15年生きることをゆるそうとおっしゃってくださったとしたら、わたしたちは躍り上がるようにして、心から「神さまありがとうございます」と言って、感謝を述べるのではないのでしょうか。そして、与えられた15年という期間、常に神さまへの感謝を忘れないはずであります。この神さまへの、尽くしがたい感謝の思いがあふれだし、神様を褒め称える言葉が讃美となるのです。今朝のみ言葉の中で、10節以降にヒゼキヤの讃美の歌が続いていくのですが、特に20節をみていただくと「主よ、あなたはわたしを救ってくださいました。わたしたちは命のあるかぎり主の神殿で／わたしの音楽を共に奏でるでしょう」と歌われております。命のある限り、主に感謝を献げ、その感謝の思いを調べとともに歌う、それが讃美のこころなのであります。讃美というのは、このように、神様に救われた、命をいただいたという体験が土台としてあるものなのであります。その時に語られたのがこのヒゼキヤの歌であり、讃美のこころであります。

### 讃美のこころ

このように、神さまをたたえる讃美の背景には神様に救っていただいたという深い感謝の体験があるのです。そして大切なことは、感謝の思いが自然に溢れ出したものが讃美なのであって、強いられてではないということです。ヒゼキヤ王の讃美も、神の救いを目の当たりにしたものが、心の内から溢れ出す感謝の思いを言葉にしたものであります。決して強いられてこのような言葉を語ったものではありません。

それに、一般的に言っても、歌というのは楽しい時には自然に口からあふれてくるものではないでしょうか。みなさんそれぞれ、気分がいいときに鼻歌を歌ってみたりすることが、どなたもおありだと思います。それは明らかに強いられてでもなければ、意識してでもなく、ごく自然におのずとわきあがってくるものです。

あるいは歌に限らなくてもいいのです。美しい風景を見た時でも同じです。例えば山登りをしていて突然視界が開け、八方が見渡せる様な見晴らしの良いところに出た時に、自然に感嘆の声があふれてきます。思わずため息をついてしまうような美しい風景、心の琴線に触れるような気高い人格に出会ったときに、わたしたちは自然に心が共鳴するのであります。

讃美もそうであります。神様の慈しみを知らされたものの内に、ごく自然に、わき起こるのが讃美なのであります。美しい夕焼けを見た時に「ああ、きれい」と自然に口をついて出るように、神様の救いの出来事に触れたものが、「ああ、すばらしい」と自然に口を衝いて出るのが讃美であります。例えば、モーセに導かれてエジプトを脱出し、エジプトの軍隊から逃れ、紅海の海を渡りきったとき、海の歌と呼ばれる歌が歌われました。「主はわたしの力、わたしの歌。主はわたしの救いとなってくださった。この方こそわたしの神。」(出15:2)これが讃美のこころなのであります。

そう考えますと、讃美歌というのは、人が自分の意思や才能によって、自由自在に生み出せるものではないということでもあります。神の愛、神の憐れみ、神の恵みに実際に触れなければ、わき起こることがありません。讃美が歌われる背後には必ず救いの出来事があるのです。ですから、わたしたちがしっかりと神様を讃美できるなら、それは神様の救いの恵みをしっかりと受け取っているということであり、それはわたしたちにとって幸いな歩みの中にあるのだと言っていいでしょう。

もちろん、わたしたちの歩みの中には感謝できるようなことばかりでなく、苦しい時もあります。そういうときには、祈ればよいのであります。祈りと讃美は、共に神へと向かう同じ言葉の源泉からでているのです。ヤコブの手紙5:13に「あなたがたの中で苦しんでいる人は、祈りなさい。喜んでる人は、賛美の歌をうたいなさい」とある通りであります。

このように、わたしたちは神さまに造られたものとして、祈りと讃美を神さまに献げていく群として召し出されており、またそうすべく使命を与えられているのであります。そして、わたしたちがそのように生きるとき、その生きる姿は最も理にかなっており、美しいのであります。わたしたちはこれからも、造られた目的に従って礼拝に集い、み言葉に聞き、共に声を合わせて神さまをほめたたえて参りたいと思います。